ねっとりとした床に、熱気が私を襲っていた。
天井にも植物の蔓のように触手が張っており、さながら触手部屋と言えた。
「はぁ、はぁ」
負けたことはわかっていた。
殺されることも覚悟していた。
だが、手足をしっかり触手で固定され、全裸にされるとは思っていなかった。
ねちゃねちゃと、触手は粘液を出していて気持ちいいとは言えない床だった。
熱気に汗ばむ身体。
みなは無事だろうか。
そんなことを考えていた。
「和。そこで多くのスポンサーを楽しませてね」
聞き覚えのある声に、私は顔を上げた。
途端に、眼前に丸く大きな口を開いた触手が現れた。
まるでゲームの世界にでも出てきそうなものに、意識が固まる。
筒状の触手は赤く、ねっとりとした白濁液を勢いよく私に吐き出した。
身体の表面が、その粘液の熱で熱くなる。

「く、うぅ」
よく見れば、顔にはかかっていなかったものの、首から下は射精されたかのようにべっとりと白色に染まっていた。
「うご、ければ……」
ねちゃ、と音がした。
私は影に覆われた。
それは、どう見ても先程の筒状で、大きな口を開いた一本のものだった。
だらりと白濁液を垂らすと、それは私の胸の上に落ちた。
そして、ねちゃねちゃと粘液をすり合わせながら、胸から離れる。
安堵もつかの間だった。
手足の触手が、まるで一の文字を描くように強制的に閉じていく。
そして、足の触手がぬるっと足から離れる。
その瞬間、私の足首に先程の筒状の触手が大きく口を開いた。
飲み込まれた足首は、まるで片栗粉でねばった熱湯に突っ込まされたようで、私はペニスが勃起するのを感じた。
「やめろ、やめてくれ」
生命の危機を感じて、ペニスはますます勃起していく。

ぬちゃぬちゃと、触手は私の言うことなど気にせずに粘液をこぼしながら私の太ももも、飲み込んだ。
「あ、ああ」
情けないことに、勝手に身体が射精し、快感が脳裏を埋め尽くす。
白濁液で全身を化粧しているのが、気持ちいいのだろうか。
わからない。
「なん、で、射精が、また……？」
出したくて止まらなくなってきたところで、筒状の触手が足を丸呑みしていることに気づいた。
熱いはずなのに、出したくて出したくてたまらない。
私はこのまま触手に飲み込まれて死ぬんだ、と他人事のように考えながら、せり上がってくる欲求と快楽に逆らえない。
思考が、真っ白になっていく。
と、ペニスが熱い液体に包まれた。
それどころか、腰、胸もいつの間にか、筒に飲み込まれ、まるでサウナの中にいるように熱気が私を包み込んだ。
「くっ、はぁ、あつ、熱いいいっ！」

熱した油の中にいるような心地に、私はこのまま生きながら溶かされると想像し、顔が青くなる。
しかし、ぬちゃぬちゃと蠢く筒の触手は、私を飲み込んだままぶしゅっと射精した。
「あぁあっ！」
顔面に、ぬめりとした体液がかかる。
目に入ったものもあり、涙が自然と出てくる。
敗者の運命は決まっている、とでも言いたげに。
「く……うぅ……あつ、ぃい」
それしか言いようがなかった。
熱気が汗を蒸発させ、ペニスは勃起し、胸は膨らみ、股から下腹部にかけて違和感がある。
のに、熱さが、私の思考を邪魔する。
くちゅくちゅと満足げに動きながら、筒状の触手は私を粘液まみれにする。
苦しい、が、同時に絶頂に達したような気持ちよさがあった。
私は相反する二つの感情に揺り動かされながら、目を固く閉じる。
もう見ていたくなかった。
直視が辛かった。
身体が、触手によって作り変えられていくのを、理解してしまった。

目が痛むのも気にせずに、私は首を横向きにする。
途端に、亀頭としか言えない触手が私の口の中へ入り込んだ。
「んー、にゃ、ほぉおおぉおぉっ！」
まるで口が女性器になったかのように、立派な大きさの触手が私の口内を占拠した。
歯が折れるほどのことはなかったが、口を開いていないといけないのが辛かった。
舌の上に鎮座する触手は、それの上で上下に動き始める。
くちゃくちゃと、喉の奥まで一気に入ったかと思えば、歯まで戻ったりと、緩急つけた動きだった。
私の意思など関係なく、それは動き続ける。
そして、口の中で風船のように膨らんでいく。
もし、ペニスと同じなら、口の中に出されてしまう。
それは、だめだ。
私はなんとか口内の触手を吐き出そうとするも、全身を食らった巨大な触手の射精をまた受けた。
白濁液はピンクがかっていて、思わず目を閉じた。
と同時だった。
「んぅんんぅんぅんぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ！」

いも知れぬ下腹部のペニスからくる快感と、口内の胃まで一気に入ってきて中出しした触手の息苦しさ。
それらのハーモニーが、私を狂わせる。
すぐに蹂躙された口の中。
触手の粘液と、唾液が混じったものを、自然と吐いていた。
今見る人がいたら、私の顔が白濁液とピンクで出来ていることを面白がるだろうと予想できた。
シコシコとペニスをしごいてオナニーされているだろうとも。
「ぐ、おえぇ、げほっ、んごぉおおぉっ！」
私は、再び触手が口内で膣内ごっこをしているんだと感じた。
だらだらと体液を頬へ流しながら、触手の肉の感触を楽しんでいる。
ぬぺっと。
白濁液にピンクがかった液体を吐き出しながら、筒状の触手がぷるんと私のおっぱいを震えさせる。
腹も股も足からも逆に戻っていくと、筒状の触手はそのまま、床の触手の海に消えた。
（おっぱいが、ある？）
ゆっくり目を開ける。

男ならありえないほど大きく実った乳房が、あった。
そして、股はペニスの下に、なにか追加されたような気配がした。
「両性具有……？」
でもなぜ？　という疑問に答える声はなかった。
だが巨大な触手がいなくなった途端、多くの大小様々な触手が私の身体に巻き付いた。
ペニスを開いた触手で飲み込み、下腹部の異変の部分に無理矢理触手が入る。
アナルにも細長い触手が入り込む感触があった。
手足は再び拘束され、私はおっぱいにも巻き付いた触手に身震いした。
それらは、私の身体の中で出入りを繰り返す。
ピンク色でデコレーションされた私は、それを目を見開いて受け入れる。
口は激しく、ペニスとおっぱいは早く、膣だろうか、そこはゆっくりと痛みを快楽に変えながら進んでいく。
アナルの触手はゆっくり膨らみ、出入り口を閉じていた。
（ぐる、じいのにきもぢいいなんて……信じたく、ないのに……）
私は穴を塞がれた苦しみに顔を歪めながら、びくびくと揺れるペニスに目をやった。
竿まで食われたペニスは、熱いひだに覆われて、勃起していた。
高まっていく射精感に、たぶん膣がある穴から入ってきた触手がピストン運動を続ける。

出入りを繰り返すそれらに、私はおかしくなりそうだった。
快感が、私の脳みそを壊そうと波のように襲ってくる。
（駄目だ、でも、くちゅ、ん、思考、が、と、ぎれる）
口内に入っている触手も、私の口を性器のように扱って。
苦しい、けど身体は火照り、汗がどんどん溢れ出てくる。
このまま、中に出されたら……。
きっと快感で狂い死にしてしまうかもしれない。
でも、気持ちいい。
ずぽずぽと犯されながら、私はそろそろだ、と感じ取る。
それぞれの触手が、太くなり、熱くなり、男性器をいじめ抜き。
来るとわかるほど触手博士になった脳に、触手たちと同時に中出しし、中出しされた。
苦しさの後に、快楽の波が来て、目が裏返る。
びくん、びくんと身体が震え、空洞の中に触手の体液がぶちこまれる。
正直、気持ちよすぎて身体が震えた。
腰を振り、もっともっとと、私は舌を動かし、逆流してきたペニスの精子たちにもったいないと思い、尻穴と膣口の溢れ出た精子にも同じ思いを抱く。
視線を下げれば、妊婦でもないのに、腹が少し膨らんでいた。

触手がそこまで入っている証拠だろうか。
それがなんだか嬉しくて、もごもごと口内の触手を刺激する。
すると、引いていく快感の代わりに、膣内の触手がいぼを持つ。
形が変わる。
太さも一回り大きくなり、私のおまんこを傷つけるように動き回る。
だが、たぷんたぷんと中に残され出された精子のおかげで、痛みはなかった。
息が荒くなる。
いつまで続くかわからない精子と触手の、きっと玩具なのだろう。
出入り口が見当たらない以上、私は死んでも触手たちに蹂躙される。
それがとても嬉しくて、笑みがこぼれる。
もう、私は狂っているのだ。
じゅぽじゅぽと精液と触手が膣とアナルで出入りを繰り返している。
より太く、より激しくなる刺激に、私はそろそろまた来ると予感し、身体をのけ反らせた。
と同時に、腹の中に触手の中身が一回、二回と幾度も放たれる。
目をむきながら、腹を見ると膣道ははっきり盛り上がっていた。
そして、それと同時に、腹が小山を作っていた。
と同時に、ぶしゅっと、膣と尻穴の触手の中身が放たれた。

まるでチューブから中身を出すように、触手の体液が私の腹を膨らませる。
ぶしゅぶしゅと、急に規則正しく射精させられていく。
私は重くなる腹に、苦痛を感じながらも同じく快感をも感じていた。
風船に空気を入れるように膨らんでいくお腹は、妊婦のようだった。
もう子宮の中に中身が入っているだろうと、推測できた。
辛い。けれども股が濡れるほど気持ちがいい。
私は目を細めると、触手の子を産むことになるのだろうか、とも思考が変わっていく。
そして、自身の精液が空っぽになっていた。
いつの間に出し尽くしていたのだろうか、わからないほど絶頂していたのだろう。
それでも、ペニスの触手がぐちゅぐちゅと私のモノをいかせようとする。
無理だ、と思いながらも、痛いほど中出しされていく自身のものに、私は顔を歪ませた。
あまりにも気持ちよすぎて、死んでしまいそうな気分になる。
駄目だとわかりながらも、まるで袋になったかのように膣内には触手の体液がぱんぱんに入り込んでいる。
腸内もひり出したい欲求と、まだまだ詰まって欲しい欲求が絡み合っている。
このままだとどうなってしまうのか、考えるだけで愉快になる。
腹が裂けるのは確定だろう。

でも、どれだけそれが気持ちいいか、馬鹿げた考えも浮かぶ。
どくんどくんと鼓動しながら、私の腹は妊婦の大きさを超え、下腹部が見えなくなった。
口内の触手も、胃の限界まで中出しを続けようと、私の口内でオナニーする。
私も舌を器用に使って、ぺちゃぺちゃと触手を刺激し、震えるそれをいろんな角度で刺激する。
内臓が押しつぶされているが、それでも腹は何処までも伸びる肉袋のごとく、膨らむことをやめない。
私も、止めたくない。
もっと、気持ちよくなりたい。
その願いにこたえるように、膣に入った触手はだんだん速度を上げていく。
横に縦に、まんじゅうのように風船のように肌色の肉袋が加速的に広がっていく。
ぶしゅっと、私は絶頂を迎えた。
特殊な体液なのか、それとも私の身体がもう人間ではないからなのか。
もう立って歩くことが不可能なほど、腹は膨らんでいて。
自分がいびつな笑顔を浮かべてるなんてことすら、気付かなかった。
触手の体液の挿入は、終わらない。
この部屋中の触手たちが、枯れ果てるまで。

ずっと。

～終～

作者：しーんーせーかー

転載・自作発言等は禁止です

二千二十一年八月二七日発行